

---

# COMPLEX

June

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

COMPLEX

### 【Zコード】

N7011

### 【作者名】

June

### 【あらすじ】

組織破壊後、平穏な生活が訪れるのだと俺達はそう願つたはずだつた、けれど…。本当の魔の手は尚もすぐそこまで来ていたなんて。いつからこうなつてしまつたんだろう…。ねえ、新一。

今度こそ私達本当に別れかな？ 最愛の人との決別。やつと会えたな？ シエリー……。再び近づく、黒い影。工藤、おまえ一体誰が好きなんや？ 摆れる心に気付いたときには、もう遅すぎたかもしれない。 あいだけは、好きになりたくなかつた…。名探偵が見せた『涙のわけ』とは。 全てはこの物語に在る……。



## キャラクター

・工藤新一：18

組織破壊後、灰原哀の作った解毒剤によつて元の姿に戻るも、その一抹さえ蘭でさえ話すことをしなかつた。毛利探偵事務所に居候する『たかし』とは何かと犬猿の仲。現在は大学受験を控える受験生の傍ら、高校生探偵として復帰するも、以前のような大振りは見せていない。蘭にはまだ告白出来ずにいる。

・毛利蘭：18

新一の幼なじみで未だ新一が好き。現在は新一と同様大学受験を控える受験生。コナンと哀が欠けた探偵団の保護者の存在で居候の『たかし』を可愛がつてゐる。新一がコナンだということは知らない。

・たかし：7

博士の家のまえで倒れていた所を博士によつて助けられ、現在は毛利探偵事務所で居候中。小1ながら事件調査や薬品類が大好き。本人曰く事件現場に出向いては、新一と推理対決をしているらしく、その実力は日暮警部も一目置いている。工藤新一2世とも言われるが、当の新一とは犬猿の仲。双子の妹を探してゐるらしくその詳細は謎。忘れられない女性がいるらしく、その話を時折新一にしている。

・服部平次：18

新一の親友で組織破壊にも協力した大阪在住の高校生探偵。現在は東京の大学進学に向けて日々勉強中。和葉への気持ちが未だわからぬ。東京に来ては『たかし』と、組織破壊に協力している間に仲

良くなつた志保とも未だ交流がある。

・富野志保：19

組織破壊後、解毒剤を完成させ、現在FBIの保護下で薬品類などを取り扱つてゐる。ジョディから『ミシェル』の面倒を見るよう託され、現在はミシェルと2人暮らし。才色兼備なせいもあるせいか、何かとアプローチされることが多いが、たいていは志保の生い立ちを知つて遠ざかっていかれ、裏では犯罪者などと言われていることも認知済み。そのせいか、以前より表情も口数も減つた。唯一笑顔を向けるのはジョディ、赤井、ミシェル、そして服部くらいである。服部に日本へ帰るよう勧められるが、志保は断固として応じない。

・ミシェル：7

証人保護プログラムを断つて、現在は志保の家に居候する小学1年生。志保の元を1日も離れない日々は日常茶飯事。志保には忘れられない男性がいることを密かに掴んでいた、勘の鋭い女の子。

・ジン

組織破壊後、姿が行方不明の人物。現在、FBIの最重要指名手配リストに名を連ねている。

## 1たかし

「いいなー、シンイチは」

「あん? つて、おめーまだ起きてたのかよ!」

いつのまにか隣にちょこんと正座をしたフサイ児の少年に新一が気付いたのは、入浴後のお決まりである事件調書に目を通してから大分たつた頃だった。

「これなんかちょーさ中、女人のハダカにさわったんでしょう?」

たかしが水着の女の死体の写真を、うらやましそうに指差す。

「バ、バーロー! それはあくまでも調査のためにだな……」

(つか、なんてこと考えてんだ、このマセガキ)

「え、でもー」

「ほらほら、おめー明日光彦たちと遊ぶ約束してんじゃねーのか?  
早く寝ないと、明日起きられなくなるぞ?」

まだまだくりくりした田で見足りなそうに新一を見るたかしの前で、新一は強引にも調書をどじ、寝床につくよう託す。正直なところ、新一はたかしに調書など見せる予定もないし、彼には早すぎると、そう思つてのことだった。たかしも新一の思ひ意図を掴んだのか、それでも残念そうにはあと小さく呟く。新一はたかしのこうゆう所でさえ、フさい児にしては大人顔負けな思考を持ち合わせていると思う。まあ、彼はある意味すこしだけ周囲より素直すぎる少年と

も言えるが。

「シンイチ、抱っこ」

たかしがいきなり甘ったるい声で新一に向かつて両手を差し出した。新一は一瞬、え？と驚く。こんなこと、たかしと会つて以来初めてだ。というより、今日はやけに新一にべつたりだ。いつもは会えたらんねえちゃんの敵とか、らんねえちゃんに近づくなとか、とにかく蘭にべつたりで、蘭の幼なじみでいつも行動を共にする新一はたかしにとつて恋敵でもあるというのに。

「いきなりどうした、おめー」

新一はそう言ってしゃがんだ目線をたかしに向ける。だがたかしは抱つこと言つたまま、新一と目を合わそとしない。それどころか、なにやら床に顔をつっぷしてしまつた。

「おい、たかし？」

たかしの顔を覗きこむように、新一が尋ねる。その表情は低すぐらした唇を顔の中央にぎこちなくよせ、長いまつ毛を強調させる目はかたくなに閉じられている、たかしの顔。たかしは一生懸命唇をかんで声を押し殺していた。新一はハツとして、たかしの要望通り床から抱き上げる。本当に、今日の彼はどうしたんだろう。新一是静かに泣くたかしの背中を撫でながら、おかあさん……と小さくつぶやく声をたしかに聞いた。彼の背景にある辛い要因についていろいろと示唆しながら、浴室のベッドへと歩を進めていく新一だったのだ。

たかし、という少年をはじめて見つけたのは阿笠博士だった。偶然にも大雨の日、自宅の前を倒れているのを通りかかった博士が見つけたらしい。当初彼は傷だらけだった。あとでわかつたこととして、その日の午前2時、米花町4丁目のある民家が全焼し、焼け跡から男女の遺体が見つかったという。それがたかしの両親だった。ちょうど家族全員寝静まつた夜だったという。たかしは覚えていな

いにしても、たかしだけが火の存在に気付き、寝ている両親を必死になつて叩き起こそうとしている図が目に浮かぶ。そうしているうちに迫つてくる炎。彼は両親を置いて、その大きな炎から一人やむを得ず逃げてきたのだろうか。新一は隣ですでにやすやすと眠りについたたかしを抱く。彼は7さいにしては小さい方だ。出会ったころからそれは知つていたが、今改めてその小ささに胸が痛んだ。出火原因やら、詳しいことはまだ調査中だといつ。わかることは一つ、たかしに肉親はもういない。頼る親戚もなかつたようで、警察からはずれ施設行きだと言われている。つまり彼は、この歳にして天涯孤独になったということだ。そこを見兼ねてか、お人よしの性か、それならと阿笠博士が引き取つたのだ。しかし育ち盛りの子供の食事をあの博士が作れるわけもなく、『コナン』と同様、たかしは蘭のいる毛利探偵事務所に引き取られることになった。

「早くおめーの愛しの蘭ねえちゃん、帰つてくるといいな」

新一は寝ているたかしに向かつて言つた。今、毛利探偵事務所はたかし以外不在である。小五郎は高校時代の友人と箱根へ、蘭は鈴木財閥の娘、園子の招待のもと、軽井沢にある別荘に遊びにいつている。お土産たくさん買つてくるからね、とかわいらしい笑顔を向けて出発していくた蘭を工藤邸の玄関からたかしはずいぶん寂しそうに見ていたつけ。今のたかしにとつて、蘭はお母さんと重なるのだろう。

(あ、けどおめー、夏休み中は独占させてやつけど、学校始まつたら蘭ねえちゃんは俺のもんだからな。夏休み中こそは……)

そう、新一はある意味、この夏休みに掛けている。蘭に告白するということ。本音を云えば、軽井沢にだつてついていきたいくらいだった。

「あー、俺たちも蘭に着いていきや 良かつたなあ」

「おれたちって、いつでもらんねえちゃんがいなきやダメなシンイチとボクを一緒にしないでよ？ 少なくともボクは待ってることくらいできるんだからさ」

もうすっかり眠りについたと思つていたたかしが、頬を膨らまして横から新一に刺を放つた。まさに一緒にされたことへの不服といつ刺だ。

「にゃ りひ……、起きてやがったな」

新一は苦笑しつつも、お返しの刺を放つかわりにたかしの横腹をつつく。するとたかしの体が布団なかで尺八に合わせて踊るヘビのようにくねくねと動いた。

「つか誰が待てねーっつた」 「シンイチのかおにそう書いてあるよ、いつもいつも。シンイチ、ほんとらんねえちゃんがだいすきなんだからっ」

そう言つてケタケタと笑うたかしを見て、新一はほつと胸を撫で下ろす。よかつた、いつものたかしを取り戻しているようだ。それと同時に自分の言つた言葉が仇となるのも感じた。

「まつ、いつも待たせてるのは俺の方だけどなつ」

「え？」

新一の口から不意にもれた言葉。それをたかしは確かに聞いていたのだろうか。新一にとつてはほとんど一人言のつもりだった。7さい児にはその言葉の意味がわからないとすこし鷹を括っていたのも事実だ。しかしたかしにはそれが新一のみが知る、新一と蘭の間にある真実なのだとわかっているふうに、そして、その真実を塗り

替えることは、決して誰にもできないと断言するかのよう」、緑色の瞳を新一に向けて、ポツリ、

「シンイチはだいじょうぶだよ……。シンイチは、や。」

そう返すたかしの瞳がなぜだか新一にはずいぶん懐かしそうな表情に変わっていくように見えて、「なんで、だ？」

思わずそう聞いてしまった。

「ぼくのいちばんあいたい人は、いつ会えるかもわからないんだ。だってね、いつもぼくの頭のなかでしか、会ってくれないんだよ。しかもいつもその人、あうとき、ぼくのあたまズキズキいためつけるんだ、ひどいでしょ？でもぼく、その人の名前も知らないし、あつたこともないんだ。かおもうつすらとしか見せてくれないし。それでも、またあいたいって思っちゃう。どんなことされても、あいたいって……」

最後はほとんどの自分に言い聞かせるたかしは、目を瞑った。そのときのたかしの言葉一つ一つの意味は、新一にさえ推理し難いものであった。まるで消されてしまった過去を懸命に取り返そうとしている様子にさえ、彼は7さいという年齢でどんな恋をしてきたというのだろう。それさえ、事件の調書なんかに興味を示す彼のことだから、平々凡々の人を好きなり、ふられた、というよくある苦い体験だけであんな言葉通りのことは起きないようだ。その例えは7さい児にとつたら大げさすぎたかもしれない。けれど、たかしの言葉は7さい児が言つにもまた大げさすぎた。時々見える、たかし、という少年の、それは鍵をなくした心の扉の向こう側なのだろうか。彼はふとしたとき、じゅうじて新一に洩らすのだ。そのとき新一はなぜか、その向こう側を見てみたくなる。手を差し伸べたくない。

その瞬間、いつも浮かぶのは何も言わず、何も残さず出ていった

あの女。田の前のたかしとあの女はどこなく似ている。

たかしもフランリとこの町から姿を消してしまいそうな予感はしないもない。こうやって、自分に洩らすなにかは、たかしなりの、そしてあの女なりのエス・オー・エスなのかもしない。

だつたら今度こそ、最後まで離してはいけない。

そう、自分のなかの何かが叫びだすのを、新一は知っている。

「探しにいこうぜ」

新一がフランリのたかしに向かつて真剣な眼差しを向ける。

「え？」

「だから、うじうじ悩んでいる時間があるなら探しにいくつつってんだよ。会えねえなら、こっちから会いにいくしかねえだろ？ あんな、行動しねえ限り、得られるもんも得られないなんてこといくらでもあるんだぜ？ それなら得られるもんもいくらでもあるつてことなんだよ」

待つだけ、嘆くだけ、それでは何も変わらない、新一はたかしにそう言ったのだ。

「……でも、ぼく

「心配すんなよ。俺がついてつから。心強え助つ人だろ？」  
にかつと笑う新一にたかしが突然プツと吹き出した。

「おいてめー……」

不機嫌な表情を作った新一の横で、その不機嫌さをエスカレートさせるよう、たかしの笑い声が大きくなつていぐ。もう二つよ、と新一が諦めようとしたとき、

「いいよつ！」

とたかしが先に切り出した。

「あ？」

「だから、ぼくのいちばんあいたい人さがすの手伝つてつ！ だ

からさつ……

「だから？」

たかしの頬が紅くなる。

「だから、いろいろとよろしく！ めいたんてい！」

たかしはそれだけ言い残して、おやすみなさいと勢いよく布団をかぶつた。

そんな様子を、新一は和かい表情で見つめる。たかしだけは守りぬく、そう心に誓つて眠りに落ちた、ある日の夜のことだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7011/>

---

COMPLEX

2010年10月10日18時13分発行